

魔男耕太郎

色使いの魔法使い

ぶんろく



Bunroku's Factory

魔男耕太郎

色使いの魔法使い

ぶんろく

Bunroku's Factory

狭い階段状の坂の終点に、大きな櫟の木が生えていた。坂の下に広がる街からも見える大木だ。その根元に、街の人から櫟の木屋敷と呼ばれる家が建っていた。街の大人たちは、男が一人、屋敷に住んでいるのを聞いてはいたが、実際に会った者は少なく、ナニモノなのか知る大人はほとんどいない。

だから、大人は子どもたちに「あそこへは遊びに行ってはいけません」と言い聞かせていた。

それでも子どもたちは放課後になると息を切らせて坂を駆け上がり、櫟の木屋敷へ遊びに行く。櫟の中ほどには、いつのころからかツリーハウス(樹上小屋)があり、街の子どもたちに格好の秘密基地を提供してきた。ハウスのテラスからは街が一望できた。夏の夕方など、秘密基地の卒業生が恋人と肩を寄せあっていることもある。

秘密基地で遊ぶ子どもたちも、櫟の木に押しつぶされるようにして建つ屋敷に誰が住んでいるのか知らなかった。また、そんなことはどうでもいいことだった。

ただ、屋敷は壁が剥げたり、窓ガラスにひびが走っていても、荒れた感じはなく、どこことなく優しげでほんわかとした建物だったから、子どもたちが「お化け屋敷」とからかうようなことはなかった。

檜の木屋敷を憎んでいるただ一人の街の人間がいた。毎日、バイクすら入れない坂を歩いて登らなければならない郵便配達だ。

8

郵便配達が坂を登り始めて一〇分、息が上がりかけた頃ようやく屋敷の門に着いた。

屋敷の周囲を一メートルほどの高さの塀が囲っている。中を覗き込めば、かなり古びてはいるが洋風の外観を持つ建物が建っていることがわかる。屋敷と呼ばれてはいるが、アパートなのだ。門柱に「ドーナツ荘」と書いてあるのでそれとわかる。そんなことを知っているのも郵便配達ぐらいである。

郵便配達は、両膝に手を置き、肩を喘がせながら大声をだした。

「まおとこさぁーン」

ぐがぁーずずず。ぐがぁーずず。

「まおとこさぁーン、郵便ですヨォ」

ぐがぁーず……ん？

カーテンを閉め切った室内は、セピアな空気の中に沈んでいる。ベッドに男が寝ている。

窓の隙間からかすかに室内にかすかに入りこんできた声に男は目を覚ました。薄く開けた目を、カーテンの破れ目から差しこんだ太陽が射た。

「うわ」

「いないんですかぁ？ 郵便ですヨォ」

「ほーいはい、今行くよ。ちよつくらまってくれー」

男は布団を跳ね飛ばすように伸びをしながら、声を張りあげた。

二階の窓越しに住民の返事を聞きつけた郵便配達は、膝から手を引き剥がすと、

肩にかけたカバンから手紙を取り出した。

ずどおーん。

アパートの中から大きな音が響いた。どうしたのかと玄関扉に顔を寄せて耳をそばだてていると、家の中からうめき声のようなものが聞こえる。

心配になった郵便配達が扉に手をかけようとしたとき、がたがたと扉が開き、分厚いめがねの奥でちんまりとした眼をしばたかせながら男が顔をだした。ぼさぼさ頭の男が腰をさすりながら顔をしかめているところを見ると、階段を踏み外したのだろう。それだけでなくもホトホト困り果てたような顔をしている男は、情けないオーラを全身から放出していた。

「大丈夫ですか、まおとこさん」

郵便配達は男の腰のあたりを覗きこみながら言った。

「何度言ったらわかるんだ。まおとこじゃなくて、まだんだ」

「あ、ごめんなさい。まおと……」

郵便配達はあわてて言葉を飲みこんだ。

「だいたいおまえさんが横着せずに部屋まで配達してくればこんなことにはならなかったんだ。部屋の前にちゃんと郵便受けもあるだろうが」

「わかってますけど、ここまで登ってくるだけで息が切れてしまつて」

「あと一三段くらい、どうということないだろう」

「それが死刑台に登るようなものなんです。前から頼んでいるように門に郵便受けを作ってくださいよ」

それには答えず男は手をだした。

郵便配達は指のひょろりと長い掌に手紙を載せると、坂道を街へ駆け下りていった。

男は郵便配達が曲り角にさしかかったのを見て、右の人差し指をヒョイと動かした。

郵便配達は足を取られて転び、坂脇の柵から身体を飛び出させ、頭をやぶに

突っ込んだ。

部屋に戻った男は、コーヒーマーカーをセットすると、冷蔵庫からドーナツを一つ取りだして口にくわえ、手紙を読み始めた。

「まあとこさま」

男は宛て名を見て舌打ちをした。破り捨てようとしたが、思いとどまった。

2Bの鉛筆で書かれた手紙だった。筆圧が高い上に、手紙の主は手に汗をかくタイプらしく、消しゴム滓を手で払いのけるたびに文字がこすれてしまっているため、手紙全体が黒く見える。

男はコーヒーをカップに注ぐと、窓際に移動して手紙の先を読み始めた。

∞

手紙を読んでいる間に、男のことを少し紹介しよう。

え、おまえはナニモノかってお尋ねですか？ 私は、魔男耕太郎の部屋の居候、

ネズミの文蔵というけちな野郎です。以後お見知り置きを。一宿一飯の恩義で、魔男の秘書を任じております。

えー、魔男耕太郎——郵便配達は「まおとこ」と呼んでいましたが、正確には「まだんこうたろう」というのが通り名。本名はとっくの昔に忘れたとうそぶいています。髪にちらはらと白いものが混じっているところ見ると四〇歳は越えていると思われます。

中肉中背、メガネをかけておりますが、それ以外、とくに特徴のある顔だちはありません。ようするに目立たない、はっきりいえば印象の薄いお人です。

生業は魔法使い。どんな魔法使いかは、おいおいご理解いただけたらと思います。が、光とドーナツを使って人々の願いを叶えるというものです。助手に妖精の光子(魔男はへこうこんと呼んでいる)がいます。彼女(?)はこのあとすぐ登場するのでお待ち願います。

なぜ、魔男(まだん)なのか。魔女と言う言葉があるのに、男だと「魔法使い」と

十把一絡で言われることが許せない、と以前言っていたことがあります。魔女狩りがあるのに魔男狩りがないのも許せないでいるようです。ちなみに「まお」と読み間違えられるのもビミョウに自尊心を傷つけられている節があります。ましてや、手紙の表書きに「間男」と書かれていると、即座に破り捨てますから、お手紙をだすときはご注意ください。

とにかく、特に思想信条あつての名乗りではなく、魔男とでも名乗らないと、魔法使いにまつたかといつていいほどみえないというのが本当のところだと思います。

さて――。

「光子」

魔男は読み終えた手紙をテーブルに置くと、声をかけた。

「おい、光子。仕事だ。起きて来い」

魔男は手を伸ばして淡い青色の蠟石細工の小箱のふたを開けた。

箱の中に敷かれた真綿の上に、半透明の姿をした妖精が寝ている。五センチ足らずの身体を小さい箱の中に目いっぱい伸ばして大の字に寝ている。妖精のベールがお腹までめくれあがり、へそがでてゐる。およそ妖精らしからぬ寝姿だ。

妖精に起きる気配はない。魔男は爪楊枝にコップの水をつけると水滴を光子の顔の上に落とした。

「があっー、ゲボッゲボッ」

とんでもない声をあげながら光子は跳ね起きた。天井にぶつかって、パフッと魔男の掌に落ちた。

「なにをするのさ、耕太郎!! あたいを殺すき?」

「なにを大袈裟な」

これは魔男が間違っていた。爪楊枝の先の水滴とはいえ、身長五センチにも満たない光子にすれば、バケツいっぱいの水を浴びせられたのも同然だ。光子が怒

るのも無理はない。

光子は妖精のベールをパサと振って水滴を落とした。

「目が醒めただろう。仕事だ」

「あああ。やだなあ。どっちみちセンスの悪い服をきるんでしょう。耕太郎お、あんた、色使いの魔法使いなんだから、もうちょつとセンスをよくしてもらいたいわよ。こないだなんて、あのショッキングピンクの唐草模様はなによ、二妖精が着る服じゃないわよ。恥ずかしくて七ミリグラムも瘡せたわよ」

「唐草はもともとブドウの蔓をモチーフにしたものだ。古来ぶどうは生命樹と言われ、命の象徴。自殺志願者の悩みを解決するにはうってつけだ。だいたい、おまえの好みなんて聞いている場合じゃない。必要なだからしかたがない。四の五の言っていないでさっさと準備をしなさい」

8

魔男に届いた手紙の差し出し人は山橋理子。坂の下の街に住む小学二年生からの

仕事の依頼だった。

学校に行くたびにいつも同じ男の子からいじめられる。勉強は嫌いじゃないけど学校に行くのが嫌になった。「助けて、まおとこさん」とあった。「まおとこ」はただけないが、小学生に免じて許すことにした。

「イジメの撃退には、勇気と優しさが必要だな」

魔男は一人つぶやくと、魔男メモと書かれたノートを手にした。ページをめくりながら魔法処方箋と書いてある紙にメモ取っている。

「ほら、光子。これを用意してきなさい」

魔男が差し出したメモの先には、大人の女性が座っていた。切れ長の目、ほっくりと白い頬、ぷっくりとした淡いピンク色の唇、鼻筋は丸みを帯びて高からず低からず。小鼻が張っているのが、おきゃんな妖精の面影を残しているといったところか。変身した光子は紺の和服に身を包んでいた。

魔男はそんな光子を見てもなにも言わない。

「あのさ、なんとか言いなよ耕太郎。綺麗とか似合うとかなんとか」

「言って欲しいのか？」

「もういいよ。ばあーか。そんな朴念仁だからいつまでも独身なんだ」
悪態をつくとき光子はメモを引ったくり、部屋から出ていった。

「光子、歩くのが面倒だからって、空を飛んだりするんじゃないぞ」
「わかってるって」

光子は町へ下りる坂道を文字通り飛ぶように駆け下った。

「だって、下駄じゃ坂道は歩きづらいんもの」などといいながら、スキーでも滑るようにすーと降りて行く。ならば、下駄など履いてこなければ良いのにとおもうのだが――。

空中を滑り降りながら光子は手にしたメモに目をやっている。

「なにになに？ ドーナツ（ビターチョコ）のかかっているもの（二個。フムフム、こ

れはいつものことね。チョコがついているってことは、今回の魔法は、ちよっぴり呪いの味つけがあるってことか。それからあ、ハイビスカスと桜草とマリゴールド、枇杷——あら、出だし好調ね。枇杷はちょっと渋いけどあの葉も実もドレスに似合う模様だわ。次にパセリとクレソン？　なんだか一気に雲ゆきが怪しくなってきた。クレソンがなければ雪割り草でも可。なにが、へでも可✓だ、耕太郎のバカ。一生懸命、足を棒にはしてないけど、探してるのはあたいだよ。簡単に言うな。で、最後に、ご、ごぼう？　あー、もうだめ。今回も期待できない。最低。耕太郎のバカ。呪ってやる。これ全部集めたらどんな模様のドレスになるやら。耕太郎のやつときたら、女にとってドレスは戦闘服だってことをわかってない。ドレスのデザイン次第でとんでもないパワーをだすってことがわかってないのよね。耕太郎が女心をわかるようになる魔法ってないものかしら。耕太郎付きの妖精になんかなるんじゃないかった」

光子は人通りのある場所に差しかかったので地面を歩き始めた。カラコロと下

駄の響きが美しい。響きに魅せられて振りかえった人たちは光子の美しさにまた驚く。男も女もポカーンと光子の後ろ姿を見やっている。

∞

「お帰り。遅かったじゃないか」

魔男は振りかえらずに光子に言った。

「遅かったじゃないでしょう。その前に言うことはないの」

光子は買い物がどっさり入った袋を魔男の目の前にボスッと置いた。

「たとえば？」

「おつかれさまとか」

「とか？」

「ごくろうさまとか、ありがとうございますとか」

「ありがとうございます。そこ置いてくれる」

「なんだか、今回は野菜が多いんだけどさ、青汁でも作るの？　な、わけないか」

「ハイビスカスの赤が勇敢、パセリの緑が勝利で、桜草が勝者の寛容。クレソンは忍耐、マリゴールドが友情。イジメの治療だから枇杷。ごぼうはいじめないで」という花言葉だ」

魔男は袋から一つ一つ取りだしながら説明した。

「ああ、花言葉なんだ。でも、花じゃなくて実もあるじゃないのさ」

「花があつてこその実だろうが。実と花、花と歯、根と茎は別々に存在するものではなくて連続している。実には花のエネルギーが、葉には実になるエネルギーが存在する。ようするに魔法でそれを取りだせばいいだけだ」

「魔法は科学だというわけなんでしょうけど、人間が聞いたら、単なるヘリクツにしか聞こえないわよ」

光子は辛らつに言い放つ。

「それにさ、魔法っていったら、世間のみなさまは、ぐつぐつ煮え立つ大鍋とか、へんてこな形をした杖とか、一度じゃ覚えられない呪文とか想像するんでしょう

けど、耕太郎の魔法ってお手軽よね。材料はスーパーやコンビニでそろっちゃうんだからさ。もうちょっと勿体つけたほうがいいんじゃないの？ そのほうが人間もありがたがるわよ」

「勿体をつける電子レンジって見たことあるか？ ささっと手伝え」

魔男に叱られた光子は大人の女性の姿から妖精の姿に戻り、窓ガラスをぬけて外に出ていった。

魔男は、机の真ん中にドーナツを置き、そのほかのものを回りに円を描いて並べた。

一歩下がって「ヨシ」と頷くと、着替え始めた。最後にクローゼットからマントを取りだし、ふわりと肩にかけた。

幸い部屋には誰もいないので笑い声はおきないが、魔男の姿は魔法使いというよりはサーカスのピエロのようだった。

魔法使いと言えば黒い服に黒いマントと相場は決まっているが、魔男のマント

は、なんと虹色だった。おまけに白いタイツ姿だ。それにスリッパ。

∞

三〇分ほどして、光子が窓ガラスを通りぬけて帰って来た。魔男がカーテンを閉めていたのでからまってもがいている。光子は透明なものはすりぬけられるのに、中途半端に透けているものには引っかかる。

「耕太郎、ちょっと助けてえ」

妖精とは思えないほど大きな声をあげながらレースのカーテンに身体をからませている光子をヒョイとつまんで助けた。

「来たのか？」

「来たわよ。まおとこさまあ助けてえ、の女の子でしょ。いま玄関に着いたところ」

トントン。

控え目なノックが聞こえた。

光子は魔男の肩にちょこつと座った。

「入りなさい」

魔男が人差し指を横にちよつと動かすとドアがあいた。

ドアの半分ぐらいの背丈の女の子が立っていた。女の子といっしょに笑い声が部屋に入りこむ。櫛の木の秘密基地で遊んでいる子どもたちの声だ。

不安そうな女の子の顔は白タイツ姿に虹色マントの魔男を見て急に歪んだ。恐怖ではない。笑いだしそうになったが、懸命にこらえている顔だ。良く見ると、自分の手をつねっている。なかなか賢い子のようにだ。

「さあ、そこに座って」

「あの一」

女の子はなんで自分がここに來たのか、いまひとつ理解できないでいた。学校から帰って家でおやつを食べていると耳元で「そのドーナツを持って櫛の木屋敷へいきますぐお行き」とささやく声がしたのだ。

「何も言わなくていい。君の手紙は受け取った。願いを叶えてあげよう。約束のものを持ってきたかい？」

「あ、はい」

女の子は、小さな紙袋を差し出した。魔男は中をのぞくとうなづいた。中には小さなドーナツが一個入っている。

「まず、君に聞きたいことがある。私のことを信じるかね。魔法使いなんてこの世の中にいないと思っているんじゃないかね？」

「信じてます。だって、三丁目のタバコ屋のお姉さんの浮気性を治したのはまあとこサンだっていうし、四丁目の鈴木さんの息子の万引き癖を直したのもまあとこサンだって聞いたし、二丁目の山本さんとおじいさんのギャングブル狂いを治したのも、一丁目の沢木さんとこのター坊のおねしよを治したのもまあとこサンなんでしょう。それから――」

魔男は「まあとこ」と女の子が言うたびに居心地悪そうに尻をもぞもぞさせて

いた。肩に乗った光子が「耕太郎も結構有名人じゃん」と言った。魔男は街の間が自分のことを「まおとこ」と呼んでいることを知り、自殺したくなった。

「わかったわかった。もういい。さ、それじゃ始めよう」

魔男は机の上のドーナツを女の子にもたせた。

「ありがとう、まおとこさん」

「こら、食べるんじゃない。両手で持って机の上に差しだしなさい。光子、早くドーナツの輪の中に入りなさい」

光子は「だってゴボウでしょう。嫌だなア」などとブツブツ言いながら女の子が差しだすドーナツの輪のちょうど真下に立った。

「かわいい妖精さん」

女の子は声を上げた。

「きみには光子が見えるんだね。よし」

魔男は机の上にあるゴボウを手にした。

「いいか、動くんじゃないぞ。私がゴボウをドーナツの穴に通す時にへいじめないで」と念じなさい。心の中で強く思うんだよ、いいかい。ゴボウのすぐあとに枇杷を通すからね。君をいじめる子の顔を思いだしながらへ治して」と念じるんだ。わかったかい？」

女の子は真剣な顔でこくりとうなずいた。女の子の返事に満足した魔男はゴボウをするりとドーナツの穴に通した。間を開けずに枇杷の葉を通した。

自分が持っているドーナツをじっと見つめていた女の子は驚いてドーナツを落とすようになった。

ゴボウも枇杷の葉もドーナツの穴から出てくることなく空中に消えた。その代わりドーナツの穴の中がポワンと明るくなったような気がした。

「動いてはダメだ。せっかく集めたエネルギーが消えてしまう」

魔男が低くつぶやいた。魔男は額から汗を流して真剣な顔をしている。

だから、女の子は何も聞かないことにした。

光子は、ゴボウの土色と枇杷の濃い緑を足して、沼から引き上げられたドジョウのような色になった自分の身体を想像して恐る恐る目を開けた。

「あれ？」

予想に反して光子は白いドレスを身に着けていた。何か言いたそうな光子を無視して魔男は続けた。

「さ、次はクレソンだ」

∞

魔男が何をしているかというところ――。

あ、ネズミの文蔵です。再びお邪魔します。

魔男の得意技は、光を集めて願いをかなえる。光の色が持つ意味、エネルギーを利用する魔法だそうです。

魔男がかつて光子に話した説明によれば、「光は粒子、つまりは物質。物質を集めてそのエネルギーを使うのだから、サイエンスなのだ!! まじないの類いでは

ない!!」ということらしい。

どうして光のエネルギーを集める道具がドーナツなのかというと、ドーナツが大好きだから!! ということもあるんですが、魔男によれば「ドーナツの穴は、そこに何もなければいい。ドーナツがあつてはじめて存在する穴、逆もまた真であり、穴があつてドーナツが存在する。穴は確かに存在する空間なのだ。ドーナツを食べると言うことは、その空間も食すということ。何もないところに空間を作り出すドーナツこそ、光の持つエネルギーを顕在化させるにふさわしい道具なのだ!!」というらしいですな。

集めた光をドーナツの穴に通す。通すことで光のエネルギーが目に見える物体——この場合つまり光子のことです——になって、それを使って人に影響を与えるのだというのが、魔男耕太郎の説明です。

もし、もっと詳しく知りたい方は、ドーナツを手土産に檜の木屋敷までどうぞ。

「それじゃ、最後はマリゴールドだ。これは友情を芽生えさせる」

マリゴールドがドーナツの穴を通り過ぎると、光子は白地のドレスにハイビスカス、桜草、マリゴールドが散ったあでやかな、かなり「イケテル」服を身にまとっていた。

光子もまんざらではないという顔をしている。

「さ、これで魔法は完成した。もうなにも心配することはない」

魔男はやさしく女の子に話しかけた。

「あの一」

「なんだい？」

「この魔法でいじめっ子が怪我するとか死んじゃうとかするんですか」

「そうして欲しいのかい？」

女の子はプルプルと頭を振った。

「そうだろう。心配しなくても大丈夫。いじめたいと思う気持ちを治すだけだか

ら」

女の子は安心したように肩や背中からふにゃつと力を抜いて、椅子に座りなおした。

「君にはこの妖精がみえるようだから、話は早い。この妖精をいじめっ子の家の前に置いて、おうちにお帰り。さあ」

さっきまでは笑い出しそうなほどおかしかった白タイツ虹色マントの男が、ボワーツと光って見えた。

女の子はぴよこんと頭を下げ、光子を握り締めると部屋を飛び出して行った。とっ、とっ、と……。

階段を二段飛ばしで駆け下りて行く足音が聞こえると、魔男はドーナツを口にくわえてベッドに横になった。

「あー疲れた。歳かなあ」

魔男はもとの情けない男にもどっていた。

そのころ光子は――。

「ちよつとあんた痛いよ。死んじゃうよお」

女の子の汗ばんだ掌の中で必死にもがいていた。

「え？」

女の子は足を止めると掌を開いた。

「まったく、せつかくのドレスがあんたの汗でシナシナだよ」

「妖精さん、しゃべれるの？」

「あたりまえだろう。こう見えても当年とって二三九歳だよ。あんたなんかよりずーっと――」

「おばあさんなのね」

「うるさい!!」

光子は女の子のポケットにいれてもらって、いじめっ子の家の前に着いた。

「お願いします」

女の子は妖精に向かってつぶやいた。

「まかしときな。暗くなるから、さっさとお帰り。おっと、今日のことは誰にも言うんじゃないよ。あんたが飼っている金魚にも、ハムスターにもだ。言ったら、魔法は効かないよ」

女の子はカクカクと小刻みにうなづくと暗くなってきた街に融けていった。

∞

「さてと。お仕事お仕事」

光子はいじめっ子の家を見上げた。どうやら二階に部屋があるようだ。二階の窓を指し、ふわっと飛びあがった。

一階の屋根に出ると猫がいた。猫は鼻先を飛んでいく光子を見るとフギヤーと一声上げて飛びかかってきた。

「おっと危ない」

光子はスイと身体を沈めた。猫は屋根からアタフタと落ちて行った。地面に着

地すると「なんだなんだ」という感じで前足で顔を一撫でした。

「どういうわけか猫にだけは見えるんだよね、あたい」

光子はカーテンが閉まっていなのを確認すると、窓ガラスをスツと通りぬけて部屋に入った。

「うへえー、臭い部屋だね」

いじめっ子はベッドに寝転んで漫画を読んでいる。

「女の子をいじめるようには見えないけどねえ」

光子はつぶやくと、男の子の顔の上をふわふわと飛んだ。光子の身体から白色、赤い色、桜色、オレンジ色の光の粒が男の子の顔の上に散っていく。

男の子はなにも気がつかずに漫画を読んでげらげら笑っている。

光子の身体から散った光の粒は、男の子の身体に触れると、掌に降った雪が融けるように、すっと吸い込まれていく。

いつのまにか光子の身体は元の透明にもどっていた。

「終わったよ」

光子のつぶやきが合図になったように男の子が大きなくしゃみを三回した。どうしたんだろうと、男の子がベッドの上に起きあがったとき、男の子は窓ガラスを通りぬけて妖精がでいくのを見たような気がした。

∞

「お帰り、ご苦労さん」

「……」

「なんだい、言って欲しいんだろう？」

「それが余計なんだよ」

魔男は着替えてキッチンで夕飯を作っていた。光子は肩に止まって魔男の手元を覗き込んだ。

「なにつくっているんだい？」

「酢豚」

「おっ、あたいの好物だ!! 耕太郎も気が利くねえ」

魔男が皿に盛った酢豚をテーブルに運ぶといつのまにか白地に一輪の真つ赤なハイビスカスが咲いているチャイナドレスに着替えた光子が座っていた。

「どうよ?」

「中華料理だからチャイナドレスって言うのも安易だよなア。でも、まあ、似合つて、綺麗だといえないこともない」

「ばあーか。……。酢豚美味しいね」

「当然だ」

「ところで耕太郎、なんでゴボウとかパセリとかを使ったのにあたいのドレスは白だったのさ」

「知らないのか、ゴボウもパセリも花の色は白だ」

「花を使えば簡単じゃないのかい? あんたのヘリクツのように」

「ヘリクツではない、科学だ!!」

「はいはい。わかってますよ。だけど、実から花の色のエネルギーを取り出すのは大変なんだろう？」

「花の時期なんて限られているし、探せと言ったら光子は探すのか？　大変だろう。わたしがちょっと力を振り絞ればいいだけだ。だいたいおまえときたら文句ばか——」

光子は酢豚をおかずにドーナツを食べている耕太郎の口に、肉の塊を押し込んで黙らせた。

「おつかれさま、耕太郎」

二日後のこと——。

昼過ぎに起きた魔男が新聞を取りに玄関を開けると、ドーナツがどっさり入った袋が置いてあった。

ドーナツを一口にくわえて、門柱に寄りかかりながら坂を眺め下ろすと、郵便

便配達が、ヒーヒー言いながら登ってくるのが見えた。(完)

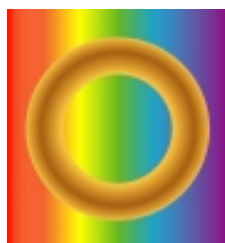
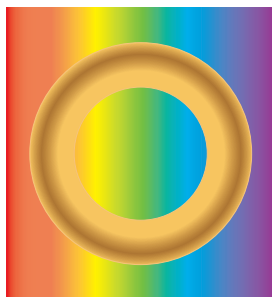
魔男耕太郎 色使いの魔法使い

2004年4月15日 初版発行

著者 ぶんろく

発行 Bunroku's Factory

©Bunroku 2004



Bunroku's Factory 魔男
耕太郎 ぶんろく
色 使 い の 魔 法 使 い
